

## 第1章：我が国の国際標準化の重点的取り組みの概要

2007年にとりまとめた「国際標準化アクションプラン（総論）」において、今後重点的に推進すべき国際標準化のテーマ及びそれに対応するISO・IECの重点TC/SCの選定の基本的考え方を明確化した。2009年版の「国際標準化アクションプラン（各論）」においても、この基本的考え方を維持し、28の技術分野別専門委員会の審議を経て、国際標準化活動の短・中期的な計画（アクションプラン）をとりとまとめた（第2章参照）。

これらの28技術分野別アクションプランを、我が国が重点的に研究開発を推進すべき分野等の観点から大括りして、我が国の国際標準化の重点的取組の概要及び進捗を整理すると、以下のとおりである。

### ライフサイエンス分野

#### ①外科用インプラント材料に関する評価方法の国際標準化

##### <標準化内容>

生体親和性の高い人工関節、人工骨等の生体活性セラミックスによる外科用インプラント材料の性能評価方法に関する国際標準化を推進する。

##### <重点TC/SC>

ISO/TC150（外科用体内埋設材）/SC1（材料）、SC4（人工関節及び人工骨）及びSC7（再生医療機器）

##### <戦略の観点>

生体親和性の高い生体活性セラミックスによる外科用インプラント材料に関する評価方法の研究開発と標準化を一体的に推進することにより、急速に高齢化社会を迎える我が国にあって、患者の身体的機能の回復、健康寿命の延伸及びQOL (Quality of Life: 生活の質)の向上に資することが期待できるとともに、当該技術の普及に資することが期待できる。

##### <2008年の進捗状況>

我が国から提案した外科用インプラント材料の生体親和性評価方法の規格2件の審議を進めている。

2009年には、生体活性セラミックス多孔体及び骨ペーストの生体親和性評価に関する国際規格提案を行う。

#### ②再生医療機器に関する評価方法の国際標準化

##### <標準化内容>

人から採取した細胞を培養する再生医療機器の評価方法に関する国際標準化を推進する。

##### <重点TC/SC>

ISO/TC150/SC7（外科用体内埋設材/再生医療機器）

<戦略の観点>

人から採取した細胞を培養する再生医療機器について、細胞分化のプロセスにおける細胞の有効性、妥当性、安全性等の評価方法の研究開発と標準化を一体的に推進することにより、再生医療の早期実用化に資することが期待できる。

<2008年の進捗状況>

軟骨に関する再生医療の評価機器について、国際規格提案を視野に入れ国際規格案の検討を行ってきている。

③ 歯科用のオーラルケア用品、歯科用インプラントの国際標準化

<標準化内容>

オーラルケア用品の品質及び歯科用インプラントの評価方法に関する国際標準化を推進する。

<重点TC/SC>

ISO/TC106/SC7（オーラルケア用品）、SC8（歯科用インプラント）

<戦略の観点>

歯科用のオーラルケア用品、歯科用インプラントに関する国際標準化を推進することにより、歯科用品の質の向上と信頼性の確保に寄与するとともに、高齢化社会における患者の身体的機能の回復、健康寿命の延伸に資することが期待できる。

<2008年の進捗状況>

我が国から提案した「ホルダー一体型デンタルフロス」、「義歯床安定用糊材」の国際規格について、我が国の議長、国際幹事のもとに、審議を進めている。

また、我が国提案の、「歯科用インプラントシステムの振り力試験」についても、我が国主導で審議を推進している。

## 情報通信分野

① AV（オーディオ・ビジュアル）・マルチメディアに関する国際標準化

<標準化内容>

デジタル家電などを用いて画像などの大量のデータを、機器相互やインターネットを介してやりとりするためのデータの仕様や、データ圧縮方式などの国際標準化を推進する。

<重点TC/SC>

ISO/IEC JTC1/SC25（情報機器間の相互接続）

ISO/IEC JTC1/SC29（音声、画像、マルチメディア及びハイパーメディア情報符号化）

IEC/TC100（オーディオ・ビデオ・マルチメディアシステム及び機器）

<戦略の観点>

デジタル技術の発展により機器間で画像や音声などのデータを相互に接続すること

が広く普及しており、そのためのデータ仕様やデータ圧縮方式の標準化を行うことによって、我が国が主導して当該技術の差別化が促進され、当該技術のさらなる普及に資することが期待できる。

#### <2008年の進捗状況>

JTC1/SC25では、2008年に日本提案のホームネットワークに関する規格4件が国際規格化（1件は2009年1月）されるなどの着実な進展があり、2009年も引き続き国際規格化に向けて活動を推進する。

JTC1/SC29では、2008年は日本が主導していた多視点映像符号化（Multi-view Video Coding (MVC)）について最終国際規格追補案（FDAM文書）が発行され、2009年には国際規格として出版される予定。同様に日本が提案している、多視点映像から自由視点の映像切り出しを可能とするFree-viewpoint TV (FTV) については、その必要性が認められ、審議が開始された。2009年は、上記案件の推進に加え、現在検討されている再構成形ビデオ符号化（RVC）などにも主導的に関わっていく。

TC100では、AV・マルチメディアで生活を豊かにするための標準化、省エネ等社会に貢献する標準化に取り組んでおり、日本は、国際幹事及び副幹事並びに複数のTAManager・幹事を担当し、当該分野の国際標準化をリードしている。

## ②光伝送システム部品に関する国際標準化

### <標準化内容>

光伝送システムで用いられる、半導体レーザ、受光器、コネクタ、モジュール等の性能、信頼性、安全性等に関する国際標準化を推進する。

### <重点TC/SC>

IEC/TC86（ファイバオプティクス）

### <戦略の観点>

光伝送システムは、IT社会に欠かせないインフラとして、高速化の進展とともに、さらなる信頼性の向上が重要となっている。そのためのシステム部品の性能、信頼性等を評価するための標準化を行うことにより、我が国が主導して、当該技術の差別化が促進され、当該技術のさらなる普及に資することが期待できる。

#### <2008年の進捗状況>

2008年は、日本提案である光配線板総則及び測定法並びにフレキシブル光配線板性能の規格化を推進したほか、MTランダムメイトロス測定、レセプタクル型コネクタ外観検査等多数の日本提案を行った。また、10月には京都で総会を開催し、当該分野の国際標準化に貢献すると共に日本のプレゼンスを更に高めることができた。2009年は、上記案件の国際規格化に向けて活動を推進すると共に、Wiggle（光モジュールと光コード接続部における機械的信頼性）に係る実験検証を日本が中心となる予定。

### ③電子タグ（RF-ID）、ICカードに関する国際標準化

#### <標準化内容>

電子タグ（RF-ID）や非接触式及び接触式ICカードの国際標準化については、実際の利用状況を考慮したデータの格納様式や、これらデータを処理するためのコマンド等の国際標準化を推進する。

#### <重点TC/SC>

ISO/IEC JTC1/SC17（カード及び個人認証）

ISO/IEC JTC1/SC31（自動認識及び交換）

#### <戦略の観点>

電子タグやICカードは、交通機関や建物への入場時の個人認証、決裁、物品管理などにおいて活用が拡大しつつあり、今後、同一の電子タグやICカードによって、種々の業界、流通の上流から下流に渡って利用されることが望まれている。そこで実際の利用状況を考慮し、工程・業界の壁を越えて情報共有するために必要なデータの取扱いに関する国際標準化を行うことによって、幅広い分野の生産性向上等が期待できる。

#### <2008年の進捗状況>

SC17では、2008年には日本が提案したTIM（視覚障害者等がカードを識別するための触覚識別マーク）の規格が出版されたほか、日本からの新規提案「カード所持者に適合したインタフェースを用いた端末利用の向上（Enhanced Terminal Accessibility: ETA）」が採択された。2009年は、IC旅券のテスト仕様を日本がリードしてISO/IEC規格としてまとめる予定である。

SC31では、2008年に日本提案のAIDCメディアへのデータストラクチャ規格適用ガイドラインやリライタブルハイブリッドメディアの試験仕様の作業原案（WD）作成作業等を行った。2009年には、上記2件の日本提案の国際規格化と、電子タグへのデータ格納規格の改定とデータ管理に関する新規提案に向けて標準化活動を推進する。

## 環境・エネルギー分野

### ①環境測定に関する国際標準化

#### <標準化内容>

温暖化関連ガス、微小粒子状浮遊物質や揮発性有機化合物（VOC）、有害化学物質等の測定に関する国際標準化を推進する。

#### <重点TC/SC>

ISO/TC146（大気の質）及びTC147（水質）

#### <戦略の観点>

大気及び水質の測定方法において、日本が技術的に優位性をもつ環境負荷物質の測定方法について、必要な精度の確保、測定の簡易化等の国際標準化を推進するこ

とにより、環境保全への貢献が期待できるとともに測定機器の普及に資することが期待できる。

<2008年の進捗状況>

TC146では、「排ガス中の一酸化二窒素自動測定法」が国際規格原案(DI)S投票で可決した。またTC147では、海洋中のCO<sub>2</sub>濃度評価方法の一つである「海洋中のアルカリ度測定」規格の発行を日本が主導して行った。

2009年においても、提案しているプロジェクトの規格化を目指すほか、新規提案も積極的に行う。

②現場における建築部位の断熱性能測定方法の国際標準化

<標準化内容>

断熱材が施工され、時間が経過した状態の建築部位(壁、床等)としての断熱性能を現場において測定し、適正に評価する方法を国際標準化する。

<重点TC/SC>

ISO/TC163/SC1(建築環境における熱的性能とエネルギー使用/試験及び計測方法)

<戦略の観点>

断熱性能は使用する断熱材に依存するため、住宅・建築物が供用される長期に亘って断熱材の性能が確保される必要がある。当該技術の標準化によって、住宅・建築物の断熱性能の向上を促進し、地球温暖化防止に資することが期待できる。

<2008年の進捗状況>

2008年には、当該分野を検討するアドホックグループにおいて、日本から提案していた「建築部位の熱抵抗及び熱貫流率の現場測定」が正式に新規提案として受理され、アドホックグループはWGに昇格し、引き続き日本がコンビナーを引き受けることとなった。2009年には、引き続きこの規格の審議を進め、国際規格発行を目指す。

③電気・電子製品分野における環境配慮

<標準化内容>

電気・電子機器に関する環境配慮設計、化学物質の測定、情報伝達に関する国際標準化を推進する。

<重点TC/SC>

IEC/TC111(電気・電子製品機器の環境配慮等)

<戦略の観点>

電気・電子機器分野における環境配慮技術で世界をリードしている日本が積極的に国際標準化を推進することにより、環境保全への貢献が期待できるとともに、産業競争力の強化に資することが期待できる。

<2008年の進捗状況>

WG2（環境配慮設計）は我が国の電気・電子産業等にも影響の大きいEUP指令（欧州におけるエネルギー使用製品に関する規制）に対応したWGであり、日本がコンビナーをつとめている。WG2で審議されている環境配慮設計の規格は、2008年9月に国際規格原案（CDV）投票で100%賛成可決し、その後コメントに対する技術的変更が無かったため、最終国際規格案（FDIS）段階をスキップし、2009年2月に国際規格（IS）発行予定となった。またWG3（有害化学物質試験方法）の規格は、12月にISとして発行された。

#### ④マイクロ燃料電池の国際標準化

##### <標準化内容>

ノートパソコン用のマイクロ燃料電池について、燃料カートリッジなどの互換性及び安全性及び燃料電池の1つのセルを評価する単セル試験方法の国際標準化を推進する。

なお、2005年からIEC/TC105（燃料電池）の国際議長を日本人が引き受け、主導的な立場で本分野の標準化を進めており、WG4（定置用燃料電池システムー性能試験法）、WG9（マイクロ燃料電池システムー性能試験法）、WG10（マイクロ燃料電池互換性）及びWG11（単セル試験法）でもコンビナーを引き受けて積極的な貢献をしている。

##### <重点TC/SC>

IEC/TC105（燃料電池）

##### <戦略の観点>

燃料電池の互換性や性能試験方法の国際標準化を推進することにより、我が国の優れた技術によって、効率的でクリーンなエネルギーの継続的確保を通じた地球環境の保全への貢献が期待できるとともに、当該技術の普及に資することが期待できる。

##### <2008年の進捗状況>

日本提案のマイクロ燃料電池互換性は、最終国際規格案（FDIS）として審議中であり、2009年中に国際規格（IS）発行予定である。また、日本がコンビナーを引き受けているWG4で、2008年末に日本から新規提案した小形固体高分子形燃料電池性能試験法も2009年から審議が開始される。また、WG11で、日本提案の単セル試験法について引き続き積極的な審議が行われる。

#### ⑤高性能工業炉の安全性、効率等の国際標準化

##### <標準化内容>

工業炉及びそれに関連する熱プロセス設備の用語、安全性、燃焼及び燃料取扱い方法、燃焼効率の評価方法等を国際標準化する。

##### <重点TC/SC>

ISO/TC244（工業炉及び関連設備）

##### <戦略の観点>

これまで我が国が開発してきた高性能工業炉の省エネ・安全技術が広く世界に認められ、国際市場における競争力の強化を図るとともに、世界の熱利用産業、とりわけ新興工業国への高性能工業炉への普及が進展し、ひいては低炭素社会の実現という世界的課題に対する我が国の貢献が期待できる。

#### <2008年の進捗状況>

2007年12月に日本から提案した工業炉の標準化を担うための新TCが2008年5月にTC244として設立され、同時に、議長及び幹事国を日本が獲得した。2009年は、2月に第1回総会を東京で開催し、安全性、燃焼・燃料及び効率に関する三つのWGが設置され、我が国は効率に関するWGのコンビナーを務める予定である。燃焼設備の安全性、工業炉一般の規格についても積極的に提案活動を行っている。なお、2009年度からこれらの取り組みについては、国際規格作成のための委託事業を実施することとしている。

### ⑥ 再生プラスチックの国際標準化

#### <標準化内容>

容器包装リサイクル法によって我が国が先行し、国際的にもリサイクル率が高い再生PETの原料の仕様及び試験方法、再生PETを用いたシート製品を国際標準化する。また、廃プラスチックのうち、最も比率が高い混合ポリオレフィン（ポリエチレン及びポリプロピレン）についても国際標準化の検討を進める。

#### <重点TC/SC>

ISO/TC61（プラスチック）

#### <戦略の観点>

環境負荷の低減、地球温暖化対策としてプラスチックのリサイクル、再資源化が求められており、我が国の先進的なリサイクル技術の国際標準化を進めることによって、再生プラスチック製品の品質確保、用途の拡大が図られ、関係市場の活性化と国際的な環境問題の改善に貢献する。

#### <2008年の進捗状況>

再生PETを検討するSC9/WG17（ポリエステル）のコンビナーに我が国の専門家が就任して主導的に国際標準化を進めており、樹脂原料の品質分類及び試験方法については、委員会原案（CD）の段階となっている。再生PET製品（無延伸PETシート）の規格案については、近く提案予定である。

再生混合ポリオレフィンについては、2008年度から国際規格案を作成するための調査研究委託事業を開始しており、2009年度も同事業を継続する。

### ⑦ 電気自動車用リチウムイオン電池の国際標準化

#### <標準化内容>

電気自動車の性能を大幅に向上させる蓄電池として普及が期待されているリチウムイオン電池のセル、パック及びシステムの性能や安全性の試験方法を国際標準化す

る。

#### <重点TC/SC>

ISO/TC22/SC21 (電気自動車)

IEC/SC21A (アルカリ蓄電池及び酸を含まない蓄電池)、TC69 (電気自動車及び電動産業車両)

#### <戦略の観点>

電気自動車の長距離走行を可能とするリチウムイオン電池の高性能化や低価格化が期待されている。我が国で開発された優れた技術を国際標準化することによって電気自動車の普及を促進し、環境負荷の低減に貢献するとともに、我が国の産業競争力強化に資することが期待できる。

#### <2008年の進捗状況>

ISOでは、2007年10月からプロジェクトチーム (ISO/TC22/SC21/PTLIB) を設置してリチウムイオン電池のパック及びシステムの試験方法に関する規格化を進めており、2009年2月には委員会原案 (CD) が作成され、2009年中に国際規格案 (DIS) へ移行する予定である。

IECでは、2008年5月に我が国からリチウムイオン電池の性能及び安全性の試験方法に関する規格化の提案を行った結果、電池関係者と電気自動車関係者の合同ワーキンググループ (IEC/TC21/SC21A/TC69/JWG69 Li) を設置し、我が国の専門家がコンビナーとなって電池セルの規格化を進めることとなった。2009年にはCDへの移行をめざす。

また、ISO/PTLIB 及び IEC/JWG は、会議を同時に開催するなど、相互に密接に連携して国際標準化を進めている。

## ナノテクノロジー・材料分野

### ①光触媒製品の性能評価方法の国際標準化

#### <標準化内容>

光触媒製品のセルフクリーニング、抗菌、水質浄化等、各種性能の評価方法を国際標準化する。

#### <重点TC/SC>

ISO/TC206 (ファインセラミックス)

#### <戦略の観点>

光触媒は、様々な環境浄化用途への応用が期待されており、我が国の研究水準は世界のトップレベルにある。光触媒の各種性能の評価方法を国際標準化することによって、我が国の優れた光触媒製品が国際市場で適正に評価されるとともに、十分な効果がない光触媒製品の市場流通を防ぐことができる。

#### <2008年の進捗状況>

紫外光応答型の光触媒については、NO<sub>x</sub>除去性能に関する国際規格が我が国主導

で作成され2007年に発行されているほか、セルフクリーニング、抗菌性、水質浄化性能等について9件の日本提案による国際規格化作業を進めている。

2009年には、可視光応答型の光触媒に関するこれまでの調査研究成果に基づき、我が国から「可視光応答形光触媒の光源」に関する国際規格化の提案を予定している。これらの活動に関して、アジア光触媒標準化会議等の場を活用しつつ、アジア諸国との連携を図りながら精力的に展開する。

## ②カーボンナノチューブの特性評価の国際標準化

### <標準化内容>

カーボンナノチューブの特性（純度、物理的特性、幾何学的特性等）や安全性を評価するために必要な及びその特性評価・計測方法を国際標準化する。

### <重点TC/SC>

ISO/TC229（ナノテクノロジー）

### <戦略の観点>

カーボンナノチューブは、エレクトロニクスや各種新型電池等への応用が期待され盛んに研究開発が進められているが、その純度、形状等の特性を評価するための客観的な基準が存在せず、産業応用上その標準化が求められている。当該技術の研究開発と標準化を一体的に推進し、我が国の優れた技術の差別化を図り、新規市場の創出に資する。

### <2008年の進捗状況>

単層・多層カーボンナノチューブのキャラクタリゼーションに関する4件の国際規格化提案を日本単独で行ったほか、透過型電子顕微鏡（TEM）を用いた単層カーボンナノチューブの計測方法について米国と共同で提案を行い、いずれも委員会原案（CD）段階にまで至っている。引き続き、2009年も日本提案の作業項目に関する規格化活動を積極的に進めるとともに、新規提案活動を継続する。

## ものづくり技術分野

### ①超電導のエレクトロニクス特性試験方法の国際標準化

#### <標準化内容>

通信用デバイスに用いられる超電導素子のエレクトロニクス特性（表面抵抗値など）の試験方法を国際標準化する。

#### <重点TC/SC>

IEC/TC90（超電導）

#### <戦略の観点>

携帯電話の基地局などで使用されるマイクロ波帯通信用デバイスに高温超電導薄膜を活用することによって小型化、高効率化、省エネルギー化が実現できる。高温超電導薄膜のマイクロ波帯におけるエレクトロニクス特性に関する試験方法について、研究

開発と標準化を一体的に推進し、我が国の優れた技術を国際標準化することによって、新規市場の創出に資する。

#### <2008年の進捗状況>

超電導薄膜の臨界電流に関するこれまでの調査研究の成果等を踏まえ、2008年には、IEC/TC90に対し、エレクトロニクス特性試験方法のうち、「高温超電導体のマイクロ波帯表面抵抗の電力依存性」及び「大面積超電導薄膜の局部的電流密度とその分布」の2件について新規提案を行った。2009年は、メンバー各国と協力し、これら国際規格原案の作成を推進する。

### ②工作機械及び関連機器に関する国際標準化

#### <標準化内容>

軸構成が複雑なため、より高い精度が求められる5軸制御制御マシニングセンタの組立に起因する誤差の影響を考慮した工作精度に関する試験方法の国際標準化を推進する。

#### <重点TC/SC>

ISO/TC39/SC2（工作機械/金属切削機械の試験条件）

#### <戦略の観点>

金属部品の精密加工（切削）に用いられる工作機械である5軸制御マシニングセンタは、通常の3軸制御の工作機械と比べ、軸構成が複雑なため、製造・組立段階に起因する誤差は、精密加工の工作精度に大きく影響するため、マシニングセンタの性能評価にとって、重要な要素である。したがって、製造・組立時に発生した誤差を考慮した工作精度に関する試験方法を国際標準化することによって、世界的に同一の手法で性能評価をすることが可能となり、ひいては、工作機械の性能の差別化の評価が可能となり、当該製品の普及に資することが期待できる。

#### <2008年の進捗状況>

2008年は、ISO 10791-6（Test conditions for machining centres - Part 6: Accuracy of feeds, speeds and interpolations）の改正作業を進め、日本から提案したWDに対する各国エキスパートからのコメント対応を実施し、2009年6月のTC39/SC2会議において委員会原案（CD）登録することを目指している。今後、当該規格以外の関係規格（ISO 10791-1~3, -7）の改正作業にも入る予定である。

### ③紙及び板紙の透気度試験方法の国際標準化

#### <標準化内容>

クラフト紙などの紙における重要特性である透気度試験方法の国際標準化を推進する。

#### <重点TC/SC>

ISO/TC6（紙、板紙及びパルプ）

#### <戦略の観点>

紙において透気度は重要特性であり、我が国の透気度試験方法は欧米諸国に比べ試験が短時間でできる等の優れた面がある。我が国の透気度試験方法を国際標準化することにより、国際商取引の基準となり、産業競争力強化に資することが期待できる。

#### <2008年の進捗状況>

透気度試験方法に関する国際提案を行ったが、5カ国以上のエキスパートの参加が得られず承認されなかった。

引き続き、中国、韓国等に協力を要請しつつ再提案を行う予定である。

#### ④ダイヤモンドライクカーボン（DLC）の国際標準化

##### <標準化内容>

ダイヤモンドライクカーボン（Diamond like Carbon: DLC）は、炭素及び水素から成るアモルファス物質で、硬度や摩擦係数等の特性がダイヤモンドに比肩している薄膜である。多様な組成や構成があり、応用範囲も多岐にわたるため、それらの分類及び特性評価方法について国際標準化する。

##### <重点TC/SC>

ISO/TC107（金属及び無機質皮膜）

##### <戦略の観点>

DLCは、給水栓、デジタルカメラ、ハードディスク、カミソリ等で幅広く利用され、近年自動車部品やペットボトルへの応用が拡大している。日本が得意な部品産業で優位を維持していく切り札的な材料と考えられるほか、摩擦損失の低減による省エネルギーへの貢献も期待されている。日本の開発が先行している分野であり、世界に先駆けてDLCの分類や特性評価方法を国際標準化することによって、DLCの普及拡大及び我が国の優れたDLC部品が国際市場で適正に評価されることを目指す。

##### <進捗状況>

DLCの分類や特性評価方法の国際標準化を進めるため、2009年度から国内外のDLC部品の実用特性や製造条件の調査及び簡易評価技術に関する調査研究委託事業を開始する。まずは、JIS化の検討を先行させ、国内の合意が得られた段階で国際規格化の提案を予定している。

## マネジメント分野

#### ①組織の社会的責任（SR）の実施ガイドラインの国際標準化

##### <標準化内容>

組織の社会的責任（SR）に関する国際的な課題（環境、人権等7分野）を規定し、それらの課題に取り組む組織の社会的責任の実施に関するガイダンスに関する国際標準化を推進する。

##### <重点TC/SC>

ISO/TMB/WG（SR：組織の社会的責任）

#### <戦略の観点>

国際的な新たな社会的ニーズであるSRに関する国際準化の検討において、日本のSRの知見や実績を反映すべく、日本から専門家が参加し、主導的な役割を果たし、国際的なガイダンスの策定に参画する。これによって、自主的、自発的な組織の社会的責任の活動が、ステークホルダーエンゲージメントを踏まえ、実施されることが期待できる。

#### <2008年の進捗状況>

2008年は、9月に総会が開催された。2009年3月には委員会原案(CD)投票が実施され、賛成多数の結果、現在は国際規格原案(DIS)作成が進められているところ。2009年は、5月に総会が開催される予定であり、我が国はTGのコンビナーを引き続き務めるなど積極的に取り組むこととしている。

### ②組織の事業継続計画(BCP)に関する国際標準化

#### <標準化内容>

災害や事故が発生した場合に、組織の重要業務が中断しないよう日常的に準備を行う事業継続計画に関する国際標準化を推進する。

#### <重点TC/SC>

ISO/TC223(社会セキュリティ)

#### <戦略の観点>

我が国企業にとって、事業継続計画(BCP)の国際標準化動向は、グローバルサプライチェーンの必須条件となる可能性もあり、非常に重要である。したがって、国際標準の検討において、日本の地震災害対策の知見や実績を反映すべく、日本から専門家が積極的に参加し、主体的に国際標準の策定に参画することとする。

#### <2008年の進捗状況>

2008年は、11月に総会が開催され、2007年11月に出版したISO/PAS22399(緊急事態準備と業務継続マネジメントガイドライン)の、委員会原案(CD)化に向けた検討や、ISO22301(緊急事態準備と業務継続マネジメント-要求事項)の作業原案(WD)化に向けた検討が進められた。2009年は、5月に総会が開催される予定であり、我が国は、WGのコンビナーを新たに務めるなど、引き続き積極的に参画することとしている。

### ③マテリアルフローコスト会計の国際標準化

#### <標準化内容>

製造プロセスにおける廃棄物等にコストを物量単位だけでなく金額単位で管理するマテリアルフローコスト会計に関する一般的な枠組みと原則に関する国際標準化を推進する。

#### <重点TC/SC>

ISO/TC207(環境マネジメント)

#### <戦略の観点>

マテリアルフローコスト会計についての一般的な枠組みと原則を示す当該規格が国際標準化することによって、①事業プロセスが環境と経済に与える影響が明確になる、②廃棄物削減・資源保護が促進される、③エネルギー削減を通じて地球温暖化防止に資する、などに資することが期待できるとともに、当該規格が国内外に広く普及することによって、サプライチェーンがグローバルに展開する我が国の企業等にとっての国際競争力の強化に資することが期待できる。

#### <2008年の進捗状況>

2007年11月に我が国からマテリアルフローコスト会計の国際標準化に関する新規作業項目提案(NWIP)を行い、2008年3月に可決され、新たにWG8(我が国が議長及び幹事を担当)がTC207に設置されたところ。2008年は、6月に第1回国際会合をボゴタ(コロンビア)にて開催し、また11月には東京にて第2回国際会合を開催。我が国から主体的に国際標準案の提案を行った。2009年も、我が国で実施した調査研究等を踏まえ主体的に取り組み、参加各国多数からの理解を得ながら、第二次委員会原案もしくは国際規格原案(DIS)の発行を目指す。

### ④カーボンフットプリント制度の国際標準化

#### <標準化内容>

製品やサービス(以下、「製品」という。)のライフサイクル全般(原材料調達から廃棄・リサイクルまで)で排出された温室効果ガスを、地球温暖化に与える影響の程度によりCO<sub>2</sub>相当量に換算し、表示するカーボンフットプリント制度について、その算定及び表示方法について国際標準化を行う。

#### <重点TC/SC>

ISO/TC207/SC7/(環境マネジメント/温室効果ガスマネジメント及び関連事項)

#### <戦略の観点>

経済産業省が平成21年度から実施するカーボンフットプリント制度の市場導入試行事業の成果及び制度に関する国際動向を踏まえ、我が国産業界の「環境力」が適切に評価される国際的なルールを確立することを目的に、国際標準化に向けた議論に積極的に参画する。

#### <2008年の進捗状況>

2008年は、6月に我が国がイギリス、ドイツ、アメリカ等と共同で行ったカーボンフットプリント制度の国際標準化作業開始の提案が加盟国の投票を経て11月に承認されたところ。2009年1月のISOコタキナバル(マレーシア)会合より本格的な議論が開始され、我が国は、国内の取組及び国際標準化に対する意見の主張を行った。2009年6月にカイロ(エジプト)会合が予定されており、我が国は、引き続き制度の国際標準化の議論に積極的に貢献することとしている。

## 社会ニーズ分野

### ① 高齢者・障害者配慮の消費生活製品に関する国際標準化

#### <標準化内容>

容器・包装の識別表示、家電製品の報知音など、社会ニーズの高い高齢者・障害者配慮の国際標準化を日中韓共同で推進する。

#### <重点TC/SC>

ISO/TC122（包装）及びTC159（人間工学）

#### <戦略の観点>

日本で開発した高齢者・障害者配慮設計（アクセシブルデザイン）を基礎として、アジア地域の特性を考慮し、消費生活製品に関するアクセシブルデザインの国際標準化を日本・中国・韓国が共同で推進していくことにより、グローバルな規模での高齢者・障害者配慮社会の推進に寄与することが期待できる。

#### <2008年の進捗状況>

現在28規格あるアクセシブルデザイン関連のJISのうち、5規格を日本・中国・韓国の共同でISOに提案し、国際審議を進めている。さらに、日本が主導して設置したアクセシブルデザインの標準化を推進するためのTC159内の作業グループにおいて、高齢者・障害者のニーズを国際規格に反映する仕組み作りやTC173に対し新たなSCの提案を行うなど、アクセシブルデザインの普及等について積極的に進めている。

### ②福祉用具の国際標準化

#### <標準化内容>

義肢装具及び車いす、音響信号機、視覚障害者誘導用ブロック等の福祉用具について、構造、性能、試験方法等に関する国際標準化を目指す。

#### <重点TC/SC>

ISO/TC168（義肢装具）及びTC173（福祉用具）

#### <戦略の観点>

義肢装具を含む福祉用具の国際規格は、アジア人には適合しにくいと思われるものが散見されるため、アジア人の体型及び生活様式を国際規格に反映させるとともに、高齢社会に直面した日本が国際標準化をリードすることにより、利用者の利便性向上、安全性確保等に寄与することが期待できる。

#### <2008年の進捗状況>

座位保持、自動車への拘束等について活発に審議が行われている車いすや義肢装具の規格策定の中で、身体的特徴や生活習慣と関わりの深い規定は、日本の事情を繰り返し主張してきた。また、日本からの提案を確実に国際規格化するため、体型、生活様式等が類似したアジア諸国との連携が不可欠であることから、中国、韓国等のアジア各国との協力体制の構築にも取り組んできている。

### ③リチウムイオン二次電池の国際標準化

#### <標準化内容>

ノートパソコンや携帯電話に使用されているリチウムイオン二次電池について、安全なリチウムイオン二次電池の使用方法の国際標準化を推進する。

また、より安全なリチウムイオン二次電池の供給のために、新たなリチウムイオン二次電池安全試験方法の国際標準化を推進する。

#### <重点TC/SC>

IEC/SC21A(アルカリ蓄電池及び酸を含まない蓄電池)

#### <戦略の観点>

リチウムイオン二次電池の安全性の確保に必要な国際標準化を推進することにより、製品安全の確保及び消費者保護に資することが期待できるとともに、当該製品のさらなる普及に資することが期待できる。

#### <2008年の進捗状況>

2006年から一部のノートパソコンや携帯電話で使用されているリチウムイオン二次電池に関して、アメリカや日本などでトラブルが発生したことから、より安全性の高いリチウムイオン二次電池の普及のため、2007年から日本から新たな安全性試験方法を提案した。現在第二次委員会原案段階であるが2009年に国際規格原案(CDV)発行を目指す。

### ④案内用図記号の国際標準化

#### <標準化内容>

我が国で普及している案内用図記号である優先シート(高齢者、妊産婦、けが人等)、オストメイト設備などを表示する図記号の国際的普及を図るため、外国人も含めた「理解度試験」等を実施した後、国際標準化する。

#### <重点TC/SC>

ISO/TC145/SC1(図記号/案内用図記号)

#### <戦略の観点>

案内用図記号は、公共機関等に広く用いられるため、既に我が国に普及しつつある図記号が国際規格に採択されない場合、その影響力は非常に大きい。したがって、我が国の優れた図記号を国際提案することによって、グローバル化が進展している中、言語によらないコミュニケーションツールである図記号の普及に資することが期待できる。

#### <2008年の進捗状況>

2008年には、優先シート、オストメイト設備の案内用図記号を試作して、この案内用図記号の国際的な理解度試験を日本、イギリス及びオーストラリアで実施し、ISOへの提案の準備を進めた。また、2005年5月に我が国から提案した「津波図記号」に関する3つの図記号は、2008年7月にISO規格として発行された(こ

れら3つの図記号については、2009年3月にJIS化)。

2009年は、我が国の公共施設等で用いられる外国人観光客等を念頭に置いた案内用図記号について検討を行い、諸外国におけるラウンドロビンテストを実施した後ISOへの提案を進める予定である。

#### ⑤建材製品中のアスベスト含有率測定方法の国際標準化

##### <標準化内容>

JISに基づく建材製品中のアスベスト含有率測定方法を国際標準化する。

##### <重点TC/SC>

ISO/TC146/SC3/WG1 (アスベスト含有量の測定)

##### <戦略の観点>

現在、バルク中(天然鉱物、建材等)のアスベスト含有量の測定方法が国際提案されているが、我が国で既にJISとして制定されているものとは考え方が異なる。このJISは、石綿障害予防規則に関連する通達で引用されていることから、JISに基づいた国際提案を行うことで、当該測定方法の国際的な信頼性を確保し、安心・安全な社会の実現に資することができる。

##### <2008年の進捗状況>

2008年には、当該WGに日本からエキスパートを派遣し、JISに基づく測定方法の有効性について各国の専門家に説明を行った。2009年には、我が国からJISに基づいた測定方法について、国際提案作成のための調査研究委託事業を通じて、新規作業項目の提案を行う予定である。

#### ⑥労働安全用保護具の国際標準化

##### <標準化内容>

労働現場で使用する呼吸用保護具について、寸法、構造、性能等の国際標準化を推進する。

##### <重点TC/SC>

ISO/TC94 (個人安全-保護衣及び保護具) / SC15 (呼吸用保護具)

##### <戦略の観点>

日本製品は軽量化が進んでいるなど、海外製品に対して作業性が優れている面がある。したがって、日本型(軽量型)呼吸用保護具を国際規格に反映することによって、作業環境の向上及び安全性の確保に資することが期待できる。

##### <2008年の進捗状況>

TC94のビジネスプランの改訂を議長国の日本から幹事国のオーストラリアに働きかけ検討している。

SC15に関しては、日韓基準認証定期協議により合意されたSC15日韓情報交換体制を活用し、韓国との連携を強化しつつ、SC15におけるアジアの影響力の強化を図ってきている。

なお、呼吸用保護具の国際規格案に日本提案の試験方法が採用され、審議を継続している。

